Institute for Women's Career Advancement and Gender Equality Development
武庫川女子大学 女性活躍総合研究所 紀要 第 2 号

1. 原著論文

新教育運動期における公江喜市郎の教育改革への提言
―「自学主義」と女子教育思想に焦点をあてて－

Kiichiro Koe's proposals for educational reform in the New Education movement: Focus on 'independent learning' and the idea of women's education, 1920-1931.

山﨑洋子

抄　録

本稿では，教師が新教育運動をいかに捉えていたかということを理解するため，兵庫県御影師範学校教諭兼訓導や兵庫県視学を勤めた公江喜市郎の自学主義と女子教育思想に関する論考を俎上に載せ，彼の見解，批判，期待などを考察した．その結果，次の 4 点が解明された．彼は，①自学主義が主知主義などを包含していることを突き止め，思想的淵源・価値を精緻に吟味する必要性を論じた，②教師を鼓舞する意図をもって「生への意思」の観点から「教育精神の根本」の確認を教師に託し，新教育運動の改革可能性に期待した，③女性の属性を人間，国民の下に位置づけ，狭義の良妻賢母主義を批判し，女性がその天職を自覚して中等教育以上の教育機会を得る意義を論じた，④ナポリの女性教育家・チビタの実践に「教育精神の根本」を見出した．従って，彼の教育改革への提言は，教師が人類共同の目的と価値に向けて使命と「教育精神の根本」を自覚し，教育研究に取り組むべきであるという見解と女性の教育機会の拡大の要請にあった，と要約することができる．

Keywords：新教育運動，自学主義，女子教育，天職の自覚，教育精神の根本

1．はじめに

19 世紀末に生起し 1930 年代初めまでにかけて展開された日本の新教育運動は，全国各地の師範学校やそこで教育された教師たちによって牽引･展開された. もちろん兵庫県下の教師もその例外ではなかった．兵庫県姫路師範学校初代校長として学校自治を導入し新教育運動のパイオニアとなった野口援太郎，兵庫県明石女子師範学校主事として分団式動的教育論を提起し実践した及川平治，芦屋児童の村小学校の桜井祐男らはその代表格である．とはいえ，これまでの兵庫県下の新教育運動についての研究では，彼らの教育思想や教育実践を中心に「大きな物語」や「大きな歴史像」[1] が描出され，新教育思想を教師たちがどのように捉えていたか，師範学校でどのように教えられていたかについては等閑視されてきた [2].

そこで着目したいのは，公江喜市郎（1897-1981）の新教育思想に対する見解である．彼は，1918 年に兵庫県御影師範学校第一部を卒業し，故郷・丹波の氷上郡幸世尋常小学校訓導を経て，1920 年には兵庫県御影師範学校の教諭兼訓導職に就いた．そして，その 6 年後の 1926 年 5 月には兵庫県属を任命され内務部学務課勤務となり，同年 11 月にはわずか 30 歳足らずで兵庫県属兼視学に任命され，翌年には兵庫県首席視学へと昇進する [3]．また，その 5 年後の 1931 年には 7 か月の期間にわたって，「全国でも前例を見ない」[4] 欧米への教育視察を任ぜられた．それ故，彼は新教育運動の真っただ中で教職に就き指導的地位を得た教師であった．だが，彼はやがて断固たる決意をもって公職を辞し，1939 年に武庫川高等女学校を設立し，その後の人生を女子教育に邁進して生涯を終える．このような彼の人生を支えた思想的基盤は，教師ら教育実践家が主導・実践する形で挑んだ新教育運動という時代精神によって形

成されたもの，と解することができよう．その意味で，公江は新教育運動の落とし子であった．しかし，彼の教育思想の解明は史料的限界などを理由に，これまで等閑に付されており，加えて彼を新教育運動の文脈で捉えた研究も皆無である．

以上の点を踏まえ，本稿が着目するのは，新教育運動がテーマにしていた自学主義への公江の評価と女子教育の理解についてである．それらを解明するための諸論考は，月刊誌『兵庫教育』[5]（兵庫教育雑誌社編集）に収録されているが，同誌は「兵庫教育会報」の役割を果たし，兵庫県下の学校教育の動向を伝える重要な媒体であった．公江は兵庫県の学校教育を主導・援助する教諭兼訓導や視学として，公的メディアを介して自らの考えを示したのである．本稿では新教育運動期における彼の諸論考の紹介と分析を通して，自学主義と女子教育思想に対する彼の見解や批判を抽出して考察し，彼の教育改革に対する提言を明らかにする．ただ，彼の論文は浩瀚な書物から引いた知識を用いて論述展開するという特徴があるが，本稿では，紙幅の都合上，多くの思想家の理論を逐一確認することはしない．まずは，限られた貴重な史料に真摯に向き合い，そこで語られた国内外の教育思想とそれらの文脈に目配りしながら，生きた声を聴き取り，「小さな歴史」を紡ぎ出す，という歴史編纂のスタンスで挑んでみたい．そして，新教育運動に関する公江の意見やコメントが新教育運動の多様性や多義性の解明を可能にし，兵庫県下の新教育史研究や女子教育史研究に資するという見通しを持ちながら，新教育運動の真っただ中で彼がどのように自学主義を捉えていたか，また彼がどのような女子教育観を有していたかを明らかにし，彼の教育思想の形成過程に横たわる根本思想やそれに基づく彼の提言の解明に取り組んでみたい．

２．新教育運動における「自学主義」対する見解－警告・批判・鼓舞・期待－

（１）国内外の新教育運動と公江喜市郎

新教育運動は国民教育制度がほぼ確立した時期に各国で共時的に生起した．それは，各国の教授法がドイツのヘルバルト（Johann F. Herbart）の機械的教授法や「知識注入と暗記」に偏重していることを批判したものであり，新しい教育や教授法を探求すべく，子どもの自由・個性・自治・自学・創造性・活動などの「教育の理想」を掲げた教育改革運動であった[6]．この運動は，イギリスやフランスでは新教育（New Education, nouvelle éducation），アメリカでは進歩主義教育（Progressive Education），ドイツでは田園教育舎（家塾）運動や改革教育（Reformpaedagogik），日本では大正自由教育と表現されるが，いずれも新教育運動と総称される歴史事象である．とりわけ，公江喜市郎が兵庫県御影師範学校で教職に就いた1920年代は，世界各地で興隆した新教育運動が活発に展開された時期であった．

日本の新教育運動は，デューイ（John Dewey）の影響を受けた東京師範学校訓導・樋口勘次郎による『新教授法－統合主義』（1899）の発刊が皮切りとなり，学校現場では「児童をして自己の活動（セルフ・アクチビティー）によりて遊戯的に学習せしむべき」[7]という自己活動の概念が受容され始めた．また，東京の高等師範学校講堂で1921年8月1日から8日までの期間に開催された一大講習会「八大教育主張」は，その気運をさらに高めていった．登壇した8人の新教育運動家と彼らのテーマは，3年間の海外派遣期間を終えて帰国したばかりの大阪府師範学校教諭・樋口長市の自学教育論，オイケン（Rudolf C. Eucken）やベルグソン（Henri-Louis Bergson）の研究に尽力し後に早稲田大学教授となる稲毛金七（稲毛詛風）の創造教育論，モンテッソーリ教育の受容と推進に一役かった日本女子大学校教授・河野清丸の自動教育論，デューイの経験主義の影響を受けた及川平治の分団式動的教育論，千葉師範学校附属小学校主事・手塚岸衛の自由教育論，後に玉川学園を創設する小原國芳の全人教育論，『創造教育の理論及実際』を上梓した広島師範付属小学校主事・千葉命吉の一切衝動皆満足論，早稲田大学ロシア文学科主任教授・片上伸の文芸教育論であった．「八大教育主張」は成功裏に終わり，地方で働く学校教師の教育革新の息吹もさらに燃え上がり，新教育運動という出来事は歴史にその名を刻むことになる．また，この時期，兵庫県下の教師に影響を与えた新教育運動のリーダーといえば，公江よりも2周り以上年長の兵庫県明石女子師範学校教諭・附属小学校主事の及川であった．及川はこの学校でデューイの経験論やオキュペーション（仕事）論に基づく教授法を取り入れ，分団式動的教育論と名称化した教授法を実践していた．さ

らに，関西には，奈良女子高等師範学校教授･附属小学校主事の木下竹次がデューイの「なすことによって学ぶ」思想を学校教育の現場で具体化し，それに基づいて『学習原論』（1923）や『學習諸問題の解決』（1927）を著していた．

このような新教育運動を，公江は 1920 年 4 月から 6 年 2 か月間奉職した兵庫県御影師範学校の授業の中で教えた．当時，彼は，論理(学) [8]，数学 [9]，心理学・教育心理学 [10]，教育学 [11]，そして専門ではない代数 [12] を教えており，いずれも体系的で論理的，板書も明確であった，と受講者は口をそろえる．下記の図 1 は，後年，彼が行った講義の様子である．一瞥するだけで，講義内容の体系，板書の明確さがとてもよく伝わってくる貴重な資料である．

図 1　公江喜市郎の講義中の様子，撮影日及び撮影場所不明
出典　武庫川学院

教え子の一人，田中武夫は，「大正時代，新教育の実践家の八大教育思潮の一つ，明石女子師範附属主事の動的教育論－分団式動的教育法－も〔公江〕先生の講義に出て来た」[13]（〔　〕引用者，以下同様）と述べ，及川の主張する 3 つの基礎，すなわち，①静的教育を改めて動的(機能的)教育とする，②教育の当体(児童)に存する事実(能力不同)を重んずる，③真理を与えるよりも，真理を探究する方法を授ける [14]，についても公江の授業で学んだ，と語っている．さらに，「自由教育，一切衝動悉皆満足主義といった主張も，〔公江〕先生のご批判と共に承り，心理学の講義ではあったが，新教育，教育思潮への目を開かせていただいた．それが私のその後の教育実践に非常に大きな力となったことを痛感し，古希を超えた今日も深い感謝を捧げている」[15] と述べている．

恩師への感謝とともに綴られた田中の発言からも，公江が取り上げた「八大教育主張」には，彼自身の批判的視点があったことがわかる．彼の講義は，「当時全国に喧伝された」[16] 新教育思想の単なる迎合や称揚ではなかったのである．では，彼の批判は新教育思想のどのような点に向けられたのであろうか．

（２）「自學創造主義の根本思想」と新教育思想への批判

新教育運動が活発に展開されていた 1926 年 11 月，公江は兵庫県下の視学に任ぜられ，翌 1927 年 4 月には首席視学へと昇進した．教育改革の渦中の教育界で「首席視学」としての重責を担うことになった彼であるが，実はその 7 か月前の 1926 年 8 月の『兵庫教育』に「自學創造主義の根本思想」と題する論考を著わし，3 頁にわたる紙幅に自らの思いを開陳しているのである．それは彼が初めて『兵庫教育』に投稿した論文であり，兵庫県内務部学務課での勤務も担っていた時期に書き綴った論稿である．以後，彼はさらに 4 本の論文と 4 本の見聞録を『兵庫教育』に投稿している．また，他者の手による彼の動静に関する記事は 8 本にのぼる．これら計 17 本のタイトル，刊行年，頁などの詳細を纏めると，以下のようになる [17]．

表 1 『兵庫教育』における公江喜市郎の原著（論考，報告書）及び記事

原著	記事	タイトル / 執筆者	刊行年月	刊行号	頁
1		自學創造主義の根本思想／縣属兼視學 公江喜市郎	大正 15（1926）年 8 月	第 442 号	24-26
2		女子の特質と国民教育に就ての管見／兵庫縣視學 公江喜市郎	昭和 2（1927）年 5 月	第 451 号	49-51
3		教権の真義と其の確立／兵庫縣視學 公江喜市郎	昭和 2（1927）年 6 月	第 452 号	13-16
	a	正しき婦人としての自覚／縣視學 公江喜市郎	昭和 3（1928）年 4 月	第 462 号	13-14
	b	欧米視察の壮途につく公江懸視学の送別会	昭和 6（1931）年 6 月	第 500 号	195-197
	c	公江懸視学の首途を送る／森　星嵐	昭和 6（1931）年 7 月	第 501 号	48-50
	d	公江縣視學外遊日程表	昭和 6（1931）年 7 月	第 501 号	51-54
4		欧米視察の随感（第一報）／ビナンにて 縣視學 公江喜市郎	昭和 6（1931）年 7 月	第 501 号	54-57
5		欧米視察の雑感（第二報）／在倫敦 公江喜市郎	昭和 6（1931）年 9 月	第 503 号	126-136
6		欧米視察の雑感（第三報）／在倫敦 公江喜市郎	昭和 6（1931）年 12 月	第 506 号	1-11
	e	在ベルリンの公江縣視学よりの消息	昭和 6（1931）年 9 月	第 503 号	144-146
	f	公江懸視学の帰朝	昭和 6（1931）年 12 月	第 506 号	155
7		欧米視察の雑感（第四報）／兵庫縣視学 公江喜市郎	昭和 7（1932）年 2 月	第 508 号	1-11
	g	公江懸視学欧米教育視察講演会日程	昭和 7（1932）年 2 月	第 508 号	11-12
	h	公江幹事を送る	昭和 7（1932）年 9 月	第 515 号	150
8		私学の振興と再建日本の確立／公江喜市郎	昭和 27（1952）年 7 月	第 24 号（※昭和 24 年 6 月創刊号）	74-75
9		信念に生きる私学／公江喜市郎	昭和 30（1955）年 10 月	第 53 号（特集号）	34-38

前頁の表 1 の内，以下で取り上げるのは，1，2，a, 5 の 4 本であるが，その内，新教育思想を真正面から取り上げているのは 1926 年の「自學創造主義の根本思想」[18] である [19]．これは，もちろん「八大教育主張」で論じられた自学主義や創造主義を念頭に置いたものである．ただ，彼には自学と創造の概念は表裏一体のものと解されており，論述内容は自学主義が中心になっている．このことを念頭におきながら，以下，彼の論文を紐解き，自学主義に対する彼の声に耳を傾けてみたい [20]．

公江喜市郎は，「その由来するところを考へてみると頗る複雑であるように思ふ」と自学主義の思想的根源の複雑さに目を向け，「それらの根本思想を尋究し論拠にどれ丈の価値があるかを見ねばならぬ」との見地から筆を執った [21]．彼によれば，自学主義は，「ショーペンハウエルが世界の根本原理を意志に帰したと同じ様な遣り方」であり，そこには，「萬物の本体というべきもの〔に〕従て宇宙の本体であり人間の本性であるところのものは自ら活動し自ら発展し自ら計画を立て」，「自ら行ひ自ら考へ自ら工夫する性能を十分養う」という根本原理がある．これはドイツの哲学者・ショペンハウアー（Arthur Schopenhauer）の論じる世界の根源，すなわち「生への意志」を有する人間への教育という観点からきている [22]．つまり，彼は自学主義が「生への意志」を有する「人間の根本原理」から導き出されたもの，と捉えるのである．

そして次に彼は，当時着目されていた「モンテッソーリ法の教育主義」を取り上げる．イタリアの医師モンテッソーリ（Maria Montessori）は，子どもが自ら学ぶことができる教具を開発した人物として今なお著名であるが，彼女の教授法をまとめた『モンテッソーリ法（*Montessori Method*）』（1912）はすぐにイギリスの新教育運動家らに着目され，その骨子は自動教育（Auto-education or self-education）だと持て囃された．その後，日本でも河野清丸著『自動教育法の原理と実際』（両円社，1916: 明誠館，1919）や野口援太郎著『自由教育と小学校教具』（集成社，1921），さらに「八大教育主張」での河野の議論によって着目されていた. しかし, 公江は自学主義の代名詞のように見做されていたモンテッソーリ法に関して,「哲学上仮定はあるが考えはあくまで生物学的で自然科学的」であり，新教育運動家が称揚していた「オイケンやベルグソンの哲学に基づいたものと同一にみることは出来ぬ」[23]，と言明する．もちろん，当時，ドイツの哲学者・オイケンについては，日本の新教育運動の担い手の一人，稲毛詛風が紹介しており [24]，フランスの哲学者・ベルグソンについても，『教育學術界』誌上で西田幾多郎や中島力造によって紹介され [25]，1920 年代には彼らの哲学を新教育の理論として援用する者も多数いた [26]．また，アメリカでは既にキルパトリックがモンテッソーリ法を批判しており [27], 彼女の理論への批判者も多数存在した．だが，たとえそのような状況があったとしても，兵庫県の教育界をリードする立場にある公江が，当時，野口や多くの教師に称揚されていたモンテッソーリ法に関して，公的なメディアを通じて，「モンテッソーリ法には哲学がない，根本原理がない」，と断じたのである．ここに彼の強固な意志が窺われよう．もちろん，彼の発言の背景には，自らの考えを自由に開陳できる議論の場があり，またその発言を受け入れる土壌や雰囲気があったはずである．しかし，たとえそうであったとしても，彼の論調は鋭い．なぜなら，彼には「人間の根本原理」の観点から自学主義を捉える必要があるとの明晰な批判があり，さらにその代表格のモンテッソーリ法の哲学的脆弱さを問うことに揺らぎはないからである．まさに彼の主張の文脈には批判に向かう信念の強固さが認められるのである．それ故，新教育運動に熱中し没頭していた読者は，覚醒を余儀なくされたに違いない．

さらに自学主義への彼の批判は，人間の意志に関連づけて展開されていく．公江によれば，「自学主義は，意志本位説」であるため，「これには必ずジェームズのプラグマティズムの本能尊重説やショーペンハウエルの意志本位説が引用され」ねばならない [28]．すなわち，ジェームズ（William James）のプラグマティズムの本能尊重説やショーペンハウエルの意志本位説に基づいてその主義は論じられねばならない．ところが，「日本で採用されている活動主義は，パーカーの説によっており，パーカーはフレーベルの影響を多く受けている」[29]．これが問題である．なぜなら，アメリカの進歩主義教育者のパーカー（Francis W. Parker）は，*Talks on Pedagogics*（1894）の著作の中で子どもの「自己活動」を重視する新教育思想を展開したが，彼の教育思想は子どもの本質を神に求めるドイツのフレーベル（Friedrich W. A. Fröbel）の教育思想の影響を受けたものであったからである．そもそもアメリカの進歩主義教育は，ヘルバルト

だけでなく，神の宿る教具・恩物を用いたフレーベル主義をも批判して生起した運動であった．にもかかわらず，日本の新教育運動のパイオニアと称された樋口勘次郎の『新教授法－統合主義』は，パーカーの「自己活動」の理論に根底から支えられていたのである．そのため，樋口の提起した教授法も概念的整合性を欠いている．公江はこうした点を鋭く突いたのである．彼の論稿を読んだ教師は，こうした批判の妥当性を理解し，納得したに違いない．ところが，彼の警告と批判は，その後も留まることを知らないかのように映る．なぜなら，彼はさらに「フレーベルの思想はショーペンハウエルの如く哲学的論理的ではなく『神の意志』を根本」としているが[30]，「それが学術的価値を持つかは疑問」であり，「此の種の思想より湧き出でたる自学主義の基礎も危うきものと言わざるを得ぬ」と断罪するからである[31]．つまり，自学主義は宗教を超えた「人間の根本原理」から導き出されねばならないにも拘わらず，彼らはキリストの「神の意志」をもち出して論じており，彼らの理論には学術的齟齬が認められる，と公江は指摘したのである．

こうした公江の批判は，最後に，新教育運動が批判したはずの主知主義に向けられる．彼は，「自学主義とは直接関係がないようであるが而かも相似たるものはマクマレーの攻究的教授法」であると述べ[32]，アメリカの進歩主義教育を率いていたマクマレー（Charles A. McMurry, 以下，引用を除いてマクマリーと記す[33].）を挙げる．マクマリーは，「ヘルバルト派の人でその根本教育思想はヘルバルトを祖述したことを明に述べている」が，彼の属する「ヘルバルト派の心理学説は観念説であって，言う迄もなく主知主義」である[34]．「此の主義から自学主義が創出され」るのならば，「自學とか創作とか想像とか云ふ事も或意味に於て理智の働きの現れ」と解せねばならない[35]．だが，「主知主義を根底とするヘルバルトの考〔え〕から此の主義が生み出される」[36]ことは理論的整合性を欠く．言うまでもなく，新教育運動が批判の鉾先を向けたヘルバルトの教育思想は，「自学主義と称する思想の根底に於て異なる」のであり，しかも，「之が明に区別されないが故に名前が同じであっても実は甚だしい混雑不統一不徹底の者となっている」からである[37]．また，それは，「此の主義の本質と思想上の地位とを判然せずして…（中略）…盲信すると或は濫用に陥り其の領域を超えることになって教育界なり思想界なりに禍せぬとも限らない」[38]からである．公江のこのような鋭い舌鋒は，彼の内心のジレンマの強さをも窺わせるが，しかし，彼は教師に対して自学主義の盲信・乱用を避け，その本質を理解することを求めたのである．

実は，それは同時に教師たちへの鼓舞や期待でもあった，と解することができる．というのも，彼は一刀両断に批判するだけでなく，教師が主体的に「この説の淵源を尋ね精密に吟味」した上で活用するならば，「教育思想界を豊富にかつ向上」できる[39]，とこの所論を結ぶからである．ここに新教育運動に対する彼の立ち位置が顕在化する．それは批判やジレンマを喚起と鼓舞に転換する独特の話法と態度でもって，客観的･原理的に問いかける兵庫県の教育界を主導する教育家としてのバランス感覚ある視座，と要約することができよう．

では，このような態度や姿勢は，女子教育に対してはどのように展開されたのであろうか．以下では，彼の首席視学時代の女子教育思想を検討し，女子教育に対する彼の考えを明らかにしたい．

３．新教育運動期における女子教育への見解―人・国民・天職・自覚－

（１）女性観と天職－狭義の良妻賢母主義への批判

新教育運動においては，女子教育の革新も重要なテーマであった．日本における女子教育は，伝統的に，西欧文明を是とする社会的風潮の中で明治維新期の宣教師やキリスト教徒によって推進された．新教育運動期には，女性に高等教育の門戸を開いた成瀬仁蔵，女性最初のジャーナリストで新学校を設立した羽仁もと子などの活躍も着目された．彼らの背景には各宗派によるキリスト教団体やその関連団体が控え，彼らに財政的援助をするような形が取られた．しかし，公江は1930年代末に自らの信ずる仏教関係者に依存することなく，女子を対象とした学校の創設に取り組んだ，いわば大志探求に没入する人物であった．この大事業に対峙する強力な意思や精神の萌芽は，彼がわずか30歳で首席視学へと昇進した直後に著した論文に見て取れる．それが，1927年5月の『兵庫教育』に掲載された「女子の特質と

国民教育に就ての管見」[40]である[41].

公江は，自由平等思想の台頭とともに女権の拡張，女子教育機関の充実，女子の職業問題が教育上の重要問題として論議されている，ということを明確に肯定した上で，その「本質に於いては異論」がないとする．しかし，「近来の一傾向として…（中略）…分析的断片的孤立的の方面に陥り，尊むべき女子の特質をも滅却されているような議論を聞くことも少なくない」と苦言を呈し，「女子教育本来の使命についての管見を述べるので叱正を乞いたい」と前置きして筆を執る[42]．彼の女性観の解明においてまず着目したいのは，男尊女卑の時代状況下にあって，「女子は人たり国家の一員たる」という考え方を前面に掲げた点である．それは，「女子が人として身体の健康を保ち，人道を重んじ，人類一般の福祉を図り，国家社会の一員として其進歩発達を図る点に於ては」「男子と根本的に異なっていない」[43]からである．それ故，女子も「人として又国民としての教育」を男子と同様に受けるべきなのである[44]．ただし，「男子と女子とは生理上及心理上に動かす可からざる自然の相異」があり，「これによって男女の天職に相違を生ずる」．すなわち，「女子の天職は到底男子を以て之に代ふ可からざるもので此点に於ては男女は根本的に異なっている」のであり，その目的を達成する手段方法は同じではなく，「社会に於ける活動の方面を異にする」[45]．それ故，男女の教育を同じにするべきだとする考えは，「暴論と言はねばならぬ」，と彼は断じる[46]．このような彼の女性観には，①人として，②国民として，③女性として，というように属性に順序がある．これは，第一に人として，第二に婦人として，第三に国民として[47]，と捉える成瀬仁蔵とは異なっている．公江にとって，女性という属性は，人であり国民であるという属性の下位に位置づけられていた．もちろん，当時，これは革新的な見解であった．

しかも，この考えは天職という概念と関連づけて述べられているのである．彼は女子教育の目的を良妻賢母主義だとする伝統的な女子教育観に対して「単に婦人の天職のみより〔良妻賢母主義を〕軽々に論断すべきではない」と述べ，「女子は女子たると同時に国家社会の一員なるが故に良妻賢母は単に女子特有の天職」という観点から論じるのではなく，「同時に国家と時制との要求に適応」[48]させるべきだ，とする．換言するならば，人として，国民としての属性を重視し，そして女性に良妻賢母像を押しつけるのではなく，女性も国家社会に求められる仕事に従事する存在だ，と解しているのである．この点に関わって興味深いのは，彼が中等教育以上の教育機会の提供について述べていることである．実は，彼は女性も「人として又国民として必要なる教育を受けねばならぬ」[49]と述べた上で，国民普通教育を受けた後に「女子に職業教育を施す」ことを排斥すべきではなく[50]，「中等以上の教育を受くるは寧ろ女子の天職に応ずる」[51]と述べ，進歩的な女性観を披歴するのである．言うまでもなく，当時の社会では，夫に仕え，子どもを産み育てることが女性の最も重要な役割であるとの認識が根強くあり，女性が中等教育以上の教育を受けたり，職業をもって収入を得たりすることは忌避されていた．このことに配慮してか，「女子の自然の天職は良妻賢母たるにあるは動かす可からざる原則」であり，「女子が…（中略）…職業に従事し又は学術の研究に一審を委ねるが如きは除外例」である，と当時の風潮や支配的な言説を肯定する姿勢をも示している[52]．しかし，同時に女性がいかに天職を全うするかについて「国家又は国民の執る方針は時処によって同じ〔では〕ない」[53]と，時代の変化や新しい視点・状況の訪れに留意することを提案する．そして，「男女の差異のみに拘泥」するのは偏見であり，「良妻賢母主義に囚はれ之を狭義に解する」ならば，「国民普通教育の本旨」を見失うことになる[54]，と釘を刺す．すなわち，彼は，男女がそれぞれの天職に応じて国家のために働くことができるように保証した国民普通教育こそが，「進化の大理法の示す所」の「人類共同の目的」の実現を可能にする，と解したのである[55]．

このように公江は良妻賢母主義の固定観念を取り払い，「進化」という言葉を用いて国民国家の発展を教育行為によって実現する，という見解を示した．そして，最後に，女子と男子の教育方法の共通点や異なる点についての「研究に待つべきものが多い」という期待を述べて文を結ぶのである[56]．従って，彼の「女子の特質と国民教育に就ての管見」には，女性の天職を実現する女子中等教育以上の教育機会の提供，狭義の良妻賢母主義を乗り越える視点の提示，女子教育の方法についての研究への期待，といった意味内容が存在する．それを彼は「人類共同の目的」と解したのである．

（2）「人・国民としての女性」観と「天職の自覚」

では，「人類共同の目的」の実現に向けて，公江は人であり国民である女性にどのような生き方を求めたのであろうか．良妻賢母というフレーズが席巻している時代状況下にあって，彼は伝統的かつ狭義の良妻賢母主義を批判し新しい女性観を示したわけであるが，それはどのような生き方なのであろうか．そのことを理解するための史料が 1928 年 4 月の『兵庫教育』に収録された講演「正しき婦人としての自覚」[57] の記録である．

「正しき婦人としての自覚」は，1928 年の 3 月に社会教化事業として兵庫県では初めて開催された一連の「縣下五地方婦人大会」での彼の講演の記録である．講演タイトルだけを一瞥すると規範的な印象を与えるが，その内容は必ずしもそうではない．この大会は，3 月 3 日に柏原町（氷上郡婦人大会），3 月 4 日に伊丹町（川辺郡婦人大会），3 月 6 日に市村（三原郡婦人大会），3 月 8 日に龍野町（揖保郡婦人大会），3 月 10 日に城崎町（但馬五郡婦人大会）と順次開催され，「婦人をして光明へ幸福へ新しき昭和の望ましき家庭への行進」を実現した「素晴らしき盛況」の大会であった [58]．登壇者は全 8 名，登壇した女性は，川辺郡婦人大会で「母としての社会事業」について話した大阪朝日新聞記者の恩田和女，揖保郡婦人大会で謝辞を述べた当会代表の小林むつ，但馬五郡婦人大会で「婦人と文化」と題して話した公民協会の山下陸奥，但馬五郡婦人大会で謝辞を述べた当会代表の田中くらの 4 名であり，男性は，兵庫教育会主事の森星嵐，会頭の平生釟三郎，県視学の賀集富治と公江喜市郎の 4 名であった．女性の登壇者に，かなり高い教養レベルを披瀝し女性参政権に言及した女性がいたことも興味深い．例えば，城崎町で講演した公民協会の上記の山下陸奥は，「国家社会が男女により建設」されているが故に，女性も「文化に貢献すべきである」としてイギリスの社会哲学者のマッケンジーの理論を紹介し [59]，さらに『男女同権論』『婦人解放の原理』などの訳書のある哲学者のジョン・スチュアート・ミルらの言葉を引用しつつ，女性参政権の導入が日本で遅れていると糾弾した [60]．このことは，兵庫県下五地方婦人大会での講演内容が極めて革新的なものであった，ということを推察するに十分である．

一方，公江は故郷の柏原町ではなく，龍野町で開催された揖保郡婦人大会に出席し，首席視学として登壇した．その記録が「正しき婦人としての自覚」である．まず彼は本題に入る前に「現代我邦の社会国家の状勢」について一言し，「独逸帝政時代最後の総理大臣ミハイリス氏の言を引いて独逸の国家が一時露国の過激派の為め赤化され」た際にドイツの女性が一斉に奮い立ち，協力して過激主義に反抗し，代議士を監視して解決した，とドイツ女性の力を称えた [61]．そして，次に，日本の政界に目を向け，「党利党略の外に国利民福を考ふるなく全く腐敗」に達しており，「現代世相は…（中略）…危難洪水が脚下に殺到している」と断じ，「聴衆を感憤せしめ」た，と報じられている [62]．社会的意識の高い聴衆を喚起する彼の勇姿が想像できよう．その後，彼は日本の歴史における「婦人の地位に論及して婦人の地位の尊厳を大に高調し且つ女大夫というよりも優しい家庭的婦人の国民生活上如何に重要な役割を演したかを例話によって説いて」[63] いく．彼が取り上げた女性は，九条武子，エレン・ケイ（Ellen Key），白蓮，乃木将軍の妻・静子，儒学者・梅田雲濱の妻・信子（上原立斎の娘）[64] と，多様であった．

九条武子は，西本願寺第 21 代法主（大谷光尊）の次女として誕生し男爵・九条良致の妻となって，歌人として仏教主義に基づく京都女子専門学校（現・京都女子大学）を設立した女性である．仏教系の女子専門学校の創設者という点で，また関東大震災後の無理がたたりこの婦人大会の 1 か月前に死亡したという点で聴衆の耳目を引く女性であった．その次に取り上げられたのは，「貞操従順等が不徳の最大なるものとして尊敬されてきた」日本の「婦人教育の方針」[65] の範疇には位置づけ難い二人の女性である．その最初は子どもの権利や女性の権利を主張して世界を席巻していたエレン・ケイである．彼女の著作 *Barnets arhundrade*（1900）は，ベルリンに留学時から訳業に取り組んでいた大村仁太郎によって『二十世紀は児童の世界』（1906）と題してドイツ語版から翻訳刊行されていた．大村は国情に合わない内容については「適宜に取捨折衷を施し」て刊行する配慮をしたと言うが，ケイのフェミニズム思想は『青鞜』や訳書を介して「性道徳の革命家」と言われ [66]，10 年後の原田実訳『兒童の世紀』によって新教育運動を牽引する著作と位置づけられていた [67]．こうした点でケイも無視し難い人物であった．その次に取り上げられた白蓮は男尊女卑の時代に出奔し，波乱万丈の人生を生きた女性である．ただ，公江の講演は，白蓮

出奔から約5年を経ており，当時の白蓮と彼女の家族の生活は，歌人の彼女の筆で賄われているという事情や歌人の九条武子との交流もあったため，看過し難い女性であったのであろう．そして，次に公江が取り上げたのは，二人の息子の戦死を体験し，明治天皇崩御に伴う夫の殉死に際して自らも死を選んだ乃木静子である．当時，彼女は女性の鏡として偶像視されていたため，彼女も無視し難い女性であった．そして，最後に取り上げられたのが儒者・上原立斎の娘で，わずか18歳で嫁ぎ，儒者の妻として献身的に尽くした梅田信子である．時代的には，江戸末期に生きた女性であるが，日本の儒教を尊重する公江ならではの意図がここに垣間見える．そして，彼はこれらの女性を俎上に載せ，「①心理的にみたる男女の相異について―知的方面の考察，情緒方面の考察－意的方面の考察，②生理的に見たる相違，③社会的に見たる相違」の3点について論じ，最後に「婦人の自覚を促し且つ母性愛の尊いことを鼓吹し信仰生活のありがたさを喜ばせてもらうようにならねばならぬ」[68]，上記の女性たちも「佛教儒教の影響を受けた厳粛な道徳に培われたものである」と論結したのである[69]．公江の講演をまとめた記者は「之を一語にしたものが彼の良妻賢母主義であると考へる」と，解説する[70]．

従って，公江の良妻賢母主義は，「佛教儒教の影響を受けた厳粛な道徳に培われた」「家庭的婦人」という枠組みで捉えられており，また最後に取り上げられた儒者の妻が公江の理想とする女性であったことも窺わせられる．とはいえ，九条武子，エレン・ケイ，白蓮といった進歩的・革新的な女性を俎上に載せ，乃木静子を経て，最後に梅田信子を取り上げるという講演内容の組み立て方は，彼の論述展開の特徴を示唆している．それは進歩的・革新的な女性と伝統的な女性をバランス良く取り上げて，多様な女性に言及する，という語り方である．彼はこうして多様な生き方の事例を示しながら，心理的，生物学的(生理的)，社会的な観点から「男女の相違」を考え，女性が自らの生き方を自覚的に受け止め，より正しい生を全うしていくことを女性に望んだのである．まさに，社会情況を念頭においた，工夫に満ちた講演であることがわかる．

では，彼が求めた「自覚」とはどのような意味内容だったのであろうか．上記の講演録「正しき婦人の自覚」にはこのことへの言及はない．彼は女性の天職を重視し，女性が中等教育以上の教育機会を得ることを推奨していたわけであるが，しかし，彼の1920年代の論考や記録には，女性の参政権についてはもちろんのこと，女性が選択した職業をいかなる姿勢や態度で成し遂げるかということについてのコメントは皆無である．推察するに，この時期の彼の思考や経験には，おそらく参政権のようなことについての問いはなかったのであろう．しかし，いったい，彼は職業をもった女性にどのような生き方を望んだのであろうか．

実は，彼の教育思想を解明する史料の中で働く女性について述べた文書が唯一存在する．それが1931年9月の『兵庫教育』に収録された「欧米視察の雑感(第二報)」[71]である．これは11頁にわたる彼の欧米視察の見聞録であるが，そこに「ナポリ軍港内のカラツチョロ艦見学－◎チビタ夫人の不良少年感化事業」[72]という項がある．その中で彼は訪問したナポリのカラチョロ艦（Ship Caracciolo, 以下，引用を除き，訳語は今日のカタカナ表記に従う）とその女性教育家のジンリア・チビタ・フランチェスキ(Giulia Civita Franceschi)のことを高く賞賛しているのである．そのチビタはナポリ軍港内の「5千トンばかりの装甲巡洋艦」[73]カラチョロの施設長として様々な課題・問題を抱えた孤児や不良少年を市民にするべく訓練した，いわば女性の教育パイオニアであった．彼女の教育方法はチビタ・システム(Civita's system)，カラチョロは「ナポリの幼子(Neapolitan urchins)」と言われたりもした．ただ，彼女は1928年に全体主義者から追い出され，カラチョロから撤退したと言われていた．ところが，実際には，彼女はその船を漁師・乗組員学校(Fishermen and Little Mariners School)と名称変更し，ファシズム当局からその船を隠しながら1933年まで進歩的な教育精神を貫いて従事したのである[74]．公江が訪問した1931年はその時期に相当する．

チビタの運営する施設については，既に，日本の新教育運動をリードしていた澤柳政太郎と長田新が1年間の欧米教育視察中に訪問し[75]，感銘の余りその様子を著作『新教育の使徒－輝ける二女性』(1923)[76]に著していた．澤柳は，「最も感心させられ，最も深く反省せしめられたのは，伊太利のチヴィタ女史と其の学校である．…（中略）…教育的に深く強く感動を受け，その人とその事業を思ひ浮かべ

る毎に尊敬の念が自然に起こるのはチヴィタ女史と其の教育とに対してである」[77] と述べており，また，長田は彼女の教育活動を「人類愛の教育」と極めて高く評価し，詳細に紹介している．おそらく，勤勉家の公江も同書を読んだことであろう．

公江のチビタ評は頗る高い．彼は彼女の「卓見は世界の在来の教育界に与えた一大巧妙となっている．モンテッソーリ女史の教育のように方法論，材料論の新しさでなくて教育精神の根本からの新しい道である」[78] と述べ，教育者としての根本精神に言及し，それを高く評価している．そして，チビタの教育方法の特徴を挙げて以下のように絶賛するのである．

> 「五百余の成年が陸に海に立派な地位についてただの一人といえども脱線者なく，夫人自らが自分の一人息子をその不良少年の中に交えて同じ教育法で育て上げた事や，伊国で第一流の貴族，政治家，学者，実業家の子弟が毎夏四ヶ月をこの艦内の不良児の間で過ごすように委託せらるることや，この艦の収容児がそんな道具を自ら造り自ら用いて漁業の新方面の開拓に力めていたるために其の功績，事業に対して政府は『国立ナポリ漁業学校』という名称を与えている事（ママ）や，夏期ここの児童は南伊の漁村に証せられた漁業講習に出かけて大人の漁夫を教育することや，其の他日常の生活及指導の方法等全く驚嘆に値する」[79]．

このように公江はチビタのパイオニア精神，進歩的な教育精神，そして忍耐強く教育活動をする姿勢を絶賛した．彼にとってチビタこそが「教育精神の根本からの新しい道」を探求した「新教育の使徒」であり，天職を「自覚」した女性だと解されたのであろう．彼の驚嘆ぶりは，この文章を「カラチョロ艦を訪れて人心の美を鑑賞したことを非常なる幸福に思ふ」[80] と結んだことに明示されている．これは，彼がフレーベルハウス，ペスタロッチ旧邸，ジュネーブのルソー銅像などを訪れた際には決して記さなかった表現である．その意味において，女性施設長チビタが彼の女性観に大きな影響を与えたことは疑い得ない．チビタとの出会いの経験は，いかなる思想的圧力にも屈せず，使命感と信念をもって次世代を育てる営みに「自覚」をもって突き進んでいく理想的な女性教育者像として彼の胸に刻まれたことであろう．

4．おわりに

以上,本稿では公江喜市郎が兵庫県属及び視学時代に記した諸論考に基づきながら彼の新教育思想の，とりわけ，自学主義と彼の女子教育思想に対する考え方やコメントを抽出して考察してきた．その際には，彼が国内外の教育思想に言及しながら自らの見解を述べるスタイルをとっているという状況を勘案し，彼の主張を国内外の教育思想の文脈に位置づけつつ解釈し考察を加えてきた．自学主義に対する彼の批判の骨子は，生徒自らの自学の推奨のためには，新しい教授法や教材に安易に飛びつくのではなく，「人間の根本原理」である「生への意志」に合致しているか否かという点からその思想的淵源を精密に吟味することが重要である，というものであった．また，女子教育に関する見解も，人として，国民として，女性として生きるということを前提に，中等教育以上の教育機会を提供し職業選択の途を準備することが重要である，というものであった．また，彼は女性が選んだ職業に対しては，チビタのように天職を自覚して生きていく姿を理想像とした．もちろん，どのような人物の論稿もそうであろうが，彼の所論に脆弱な点がないわけではない．時代的限界・制約もあり，1920 年代の時点では，女性を個人として捉える女性観やジェンダー意識は彼には見られない．だが，いずれの見解も，彼の広い視野とバランス感覚がうまく働く形で展開されており，伝統的な旧い教育思想と進歩的な新教育思想双方への目配りがなされていることがわかる．

こうした公江喜市郎の新教育運動に対する様々な見解は，教育改革に対する 30 歳代の若き県視学の提言であったと，捉えることができる．それは，一義的に，女性の教育機会を拡大し，人類共同の目的と価値に向けて教師が使命と「教育精神の根本」を自覚し教育研究に取り組む，という提言であった，と要約できる．彼が指摘したように，新教育運動は様々な思想を取り込む形で，それぞれの教育思想の本質や原理を吟味検討することなく，学校現場で奨励された．その勢いは，全国各地だけでなく兵庫県下の地方の学校にも大きな影響を与えた[81]．公江はその受容の仕方に憂慮し，警告を発し，研究の必要性を教師に伝え，鼓舞し期待したのである．教育史研究上，県の指導者がこのような考えを示していたという史実は，新教育運動の思想的幅の広さと多義性を示しており，歴史の空白を埋める一助に資するように思われる．この意味において，緒に就いたばかりの研究ではあるが，公江喜市郎の諸論考は貴重であり，彼の提言は看過し難い．

既に述べたように，兵庫県下の新教育運動史研究において，全国的に著名であった野口や及川については多くの研究蓄積がある．だが，従前の研究では，新教育運動期の「名もなき人々の声を聞く」小さな歴史の解明は，未着手状態であり，また，女子教育史研究も手つかずである．さらにまた，公江喜市郎の教育思想やその根本原理の構造化・再構成の課題も残されている．いずれも残された課題は大きく重いが，今後の研究に譲りたいと思う．

＜謝辞＞

本論執筆に取り組みました3年間の過程では，多くの方々からのサポートを得ました．資料収集に際してご協力くださいました武庫川女子大学附属図書館学習・研究支援カウンターのスタッフの方々，既に多くの資料収集をされていた共通教育部教授の古野貢先生，「自校教育」の重要性を認識されていた男女共同参画推進室事務部長の私市佐代美氏には，様々な面でご助力をいただきました．また，前学長（2008年4月～2018年3月）の糸魚川直祐先生には，ご高齢にもかかわりませず，本論文の執筆過程において折に触れ多くのご助言やサポートを賜りました．ここにお名前を記し，改めて衷心より御礼を申し上げたいと存じます．ありがとうございました．

---

[1] 近年の歴史研究では，「大きな物語」の終焉を告げたポスト・モダニズムを乗り越える形で，再び，大きな歴史像を描く必要性が主張されているが，兵庫県下の新教育運動の研究という点では，「小さな物語」を描出する課題は残されている．

[2] もちろん，1990年代には「女子教育とジェンダー」といったテーマの研究もなされてきた．例えば，中嶌邦「女子教育研究と日本教育学会」『教育学研究』（1992, 59（3）, pp. 402-403），あるいは「第7章 ジェンダーと教育」教育史学会編『教育史研究の最前線Ⅱ』（2016, pp. 178-183）を参照．

[3] この時期の公江喜市郎の職歴については，『風涛偕に和して』（公江喜市郎先生叙勲記念会，1967）ではなく，『公江喜市郎先生追悼録』（武庫川学院，1982，pp. 460-461）に従った．

[4] 公江喜市郎『百翁を偲びて』株式会社ナニワ印刷所，1962, p. 20.

[5] 『兵庫教育』については，国立国会図書館サーチ参照（2022年10月18日取得，https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000020175-00）．また，157号刊行の1902年9月から216号刊行の1907年10月までの期間は，『兵庫縣教育會報』というタイトルで，私立兵庫縣教育會事務所から刊行されている（2022年10月18日取得，https://ci.nii.ac.jp/ncid/AN00209726）．そのため，1907年11月号は，217号となっている．なお，『兵庫教育』は今も出版されている刊行物である．

[6] 長尾十三二監修『新教育運動選書』全30巻，別巻3巻の計33巻（1983-1990）を参照．

[7] 樋口勘次郎「小序」『新教授法－統合主義－』同文館，1899，頁記載無し．なお，本書は信州上田町での教員研修会で樋口が講演した内容を兵庫県出身の高等師範学校嘱託・芦田恵之助が筆記した記録に基づいたものである．

[8] 下村七郎（御影師範，昭和3年卒業生）「LOGIC」武庫川学院『公江喜市郎先生追悼録』大和出版印刷株式会社，昭和57年，p. 34.

[9] 田中武夫（御影師範，昭和2年卒業生）「公江先生の教えをうけて」同上書，p. 36.

[10] Ibid.; 玉谷七郎（御影師範，昭和2年卒業生）「公江先生の教えをうけて」同上書，p. 39.

[11] 土井貢（御影師範，昭和4年卒業生）「公江先生の教えをうけて」同上書，p. 41.

[12] 戸田幸次（御影師範，昭和4年卒業生）「御影師範で公江先生の教えをうけて」同上書，p. 42.

[13] 田中武夫，op. cit., p. 37.「八大教育主張」は，八大教育思潮とも呼ばれていた．本稿の引用では原典に従う．

[14] Ibid., p. 38.

[15] Ibid.

[16] Ibid.

[17] なお，公江自身の論稿や彼の講演録の存在や所在については彼自身が生前にほとんど語っていなかったという事状もあり，『兵庫教育』誌に17本もの論文等が存在することについては，これまで明らかにされてこなかった．

[18] 公江喜市郎「自學創造主義の根本思想」『兵庫教育』1926年8月，第442号，pp. 24-26.

[19] これはおそらく彼が1927年から首席視学になったこととも関係があるのではないかと推察されるが，これらの精緻な考察は次に譲る．

[20] 引用文の表記に関しては，可能な限り原文に合わせたが，それが不可能な場合は新字体を使用した．

[21] Ibid., p. 24.

[22] Ibid.
[23] Ibid., p. 25.
[24] 稲毛詛風『オイケンの哲学』（大同館書店，1913）参照.
[25] 例えば，大日本学術協会編『教育学術界』（1911 年 11 月 5 日）には，西田幾多郎「ベルグソンの哲學」（pp. 75-85）が，また，同『教育学術界』（1911 年 12 月 10 日）には，中島力造「ベルグソンの自由意志論（二）」（pp. 15-20）がある．さらに，中島はベルグソンの自由意志論を連続的に掲載していた．
[26] 橋本美保・田中智志編著『大正新教育の思想－生命の躍動』（東信堂，2015）参照.
[27] See William H. Kilpatrick, *The Montessori System examined,* New York: Houghton Mifflin, 1914（Riverside educational monographs/edited by Henry Suzzallo）（平野智美監訳・鈴木弘美訳『モンテッソーリ法の検討』東信堂，1991）
[28] 公江喜市郎，1926, op. cit., p. 26.
[29] Ibid.
[30] Ibid.
[31] Ibid.
[32] Ibid.
[33] 藤本和久『マクマリーのタイプ・スタディ論の形成と普及－カリキュラムとその実践を読み解く基盤』（風間書房，2018.）参照.
[34] 公江喜市郎，1926, op. cit., p. 26.
[35] Ibid.
[36] Ibid.
[37] Ibid.
[38] Ibid.
[39] Ibid.
[40] 公江喜市郎「女子の特質と国民教育に就ての管見」『兵庫教育』1927，第 451 号，pp. 49-51.
[41] また，『百翁を偲びて』や『妻を憶うの記』（1969）の著作の中でも，母や妻に関する記述が存在する．これらの文献からも彼の女性観を解明することができるが，本論では紙幅の都合上，とりあげない．
[42] 公江喜市郎，op. cit., 1927, p. 49.
[43] Ibid.
[44] Ibid.
[45] Ibid.
[46] Ibid.
[47] 永藤清子「成瀬仁蔵の女子教育思想―女子教育と家政学の構想」『甲子園短期大学紀要』第 39 号，2021, p. 3.
[48] 公江喜市郎，1927, op. cit., pp. 49-50.
[49] Ibid., p. 50
[50] Ibid.
[51] Ibid.
[52] Ibid.
[53] Ibid.
[54] Ibid., p. 51.
[55] Ibid.
[56] Ibid.
[57] 公江喜市郎「正しき婦人としての自覚」『兵庫教育』第 462 号，1928, pp. 13-14.
[58] 森星嵐「縣下五地方婦人大会」『兵庫教育』第 462 号，1928, p. 1.
[59] この人物は，社会哲学を創始した J・S・マッケンジー（John Stewart Mackenzie, 1860-1935）である．マッケンジーとイギリス新教育運動の関係については次を参照．山﨑洋子「J・S・マッケンジーの宗教観と『教育の新理想』」『イギリス新教育運動の生起と展開－教師の自律性と専門職化の歴史－』東京：知泉書館，2022, pp. 144-161.

[60] 山下陸奥「婦人と文化」『兵庫教育』第 462 号，1927, pp. 18-19.

[61] 公江喜市郎，1928, op. cit., p. 13.

[62] Ibid., p. 14.

[63] Ibid.

[64] 高瀬武次郎『梅田雲濱』皇教会出版，1941, p. 29.

[65] 公江喜市郎，1928, op. cit., p. 14.

[66] エレン・ケイ著，本間久雄訳『エレン・ケイ論文集』玄同社，1922, p. 1.

[67] See Yoko Yamasaki & Hiroyuki Kuno（eds.）*Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan,* Oxon: Routledge, 2017, pp. 20-22, 26-27. 山﨑洋子「教育学におけるイギリス教育思想の受容とネーミング―明治初期から昭和初期の『タイトル訳』に着目して―」玉井暲編『ネーミングの言語文化』（言文研研究叢書 1）武庫川女子大学言語文化研究所，大和出版印刷株式会社，2022, pp. 136-168.

[68] 公江喜市郎，1927, op. cit., p. 14.

[69] Ibid.

[70] Ibid.

[71] 公江喜市郎「欧米視察の雑感（第二報）」『兵庫教育』第 503 号，1931, pp. 126-136.

[72] Ibid., p. 132.

[73] Ibid.

[74] Maria Antonietta Selvag, From urchins to sailors: an educative and civic experiment in Naples（1913-1928）: The story of “Caracciolo”, between poverty, social solidarity and education challenges, *Academicus - International Scientific Journal,* MMXIV-9, pp. 171-179. https://academicus.edu.al/nr9/Academicus-MMXIV-9-213-221.pdf, accessed 17 Oct. 2022.

[75] 日本人が政府から派遣されてチビタの施設を訪問したことについては，イタリア語版のウィキペディアに記されている． Giulia Civita Franceschi, https://it.wikipedia.org/wiki/Giulia_Civita_Franceschi, accessed 21 Oct. 2022.

[76] 澤柳政太郎・長田新『新教育の使徒－輝ける二女性』日本社蔵版，1923, pp. 9-89.

[77] 同上書，p. 12.

[78] 公江喜市郎，1931, op. cit., p.132.

[79] Ibid.

[80] Ibid.

[81] See Yoko Yamasaki, Hiroyuki Kuno（eds.）, *Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan,* Routledge, 2017.

Kiichiro Koe's proposals for educational reform in the New Education movement: Focus on 'independent learning' and the idea of women's education, 1920-1931.

Yoko Yamasaki

Kiichiro Koe（1897-1981）, the founder of Mukogawa Women's University, was a teacher of Mikage Normal School in Kobe, 1920-26, a Hyogo Prefectural Inspector, 1926-1932. This paper reviews his essays on 'independent learning' and women's education, examining his views. I reveal that: (a) he insisted the need to examine philosophical origins and values of 'independent learning' in detail; (b) intending to inspire teachers, he entrusted them with confirming 'fundamentals of the educational spirit' from the perspective of a 'will to life', and hoped for the reform potential of that movement; (c) he considered the attributes of women as human, national, and female, in that order, criticised the narrowly defined 'good wife and wise mother' principle, and insisted on women's awareness of their calling and having opportunities beyond secondary education; and (d) sent by Hyogo prefecture in 1931, he was inspired and encouraged by the project of Giulia Civita Franceschi, with her 'education-spirit', a female pioneer who directed the ship 'Caracciolo' as a Fisherman and Young Mariners' school in Naples. Koe's proposals for educational reform are summarised as a call for teachers to be aware of their mission, an 'education-spirit' towards common aims and humanitarian values, to engage in educational research and to expand educational opportunities for women.

Keywords: New Education movement, independent learning, women's education, self-awareness of calling, education-spirit